

# 彩

## 私と患者のエピソード ～薬剤師（医療事務）の立場から～

### 多職種連携の可能性

私が多職種連携の可能性や地域包括ケアシステムのあるべき姿について考えられたのは、ある女性患者さんの訪問薬剤管理指導に関わったことがきっかけです。その方は自宅で旦那様やご家族と共に暮らしているものの、常時ベッドの上での生活を余儀なくされ、私のお届けする薬も中心静脈栄養のための点滴、緩和ケア用の麻薬製剤、下剤、制吐剤などでした。ご家族の温かい支援もあって穏やかにニコニコとした笑顔で私を迎えてくれていたものの、時折、吐き気に苦しむ様子も見られるようになりました。そして、せん妄の処方も出て症状の進行も窺えたある日、その方は美容師さんに髪を切ってもらっていました。成程、医療や介護職だけでなくこういう人たちも在宅訪問業務をしているのだなと思いつつも、患者さまご本人はそれまでに幾度か見せていた苦しげな表情は嘘のように安ら気に満ちた神々しささえ感じる笑みを湛えていました。帰り際、旦那さんに「今日の奥様は綺麗でしたね」と声をかけると旦那様もどこか嬉しげな顔を見せてくれました。そして、それは私が見たその方の最後の表情でした。きっと、その方は最後まで女性としての尊厳を保ったまま旅立たれたことでしょう。それを与えたのは医師でも薬剤師でもなかったのです。地域包括ケアシステムの理念が「人が住み慣れた地域で最期まで自分らしく暮らすこと」ならば、その人が健康な時に屋内外で行っていたこと、楽しんでいたことは可能な限り継続されるべきだと思います。私の中の多職種連携という概念に存在していた一枚の壁が取り除かれたことを実感できた事例です。

お名前・ペンネーム

竹田恒一

